

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「英語（筆記）」試験問題は、高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを目的に、次のような方針の下に作成した。

- (1) 高等学校学習指導要領に準拠し、実践的コミュニケーション能力の達成度を測る。
- (2) 現代の標準的な英語を言語材料とする。
- (3) 語彙、語法、慣用句、文法、表現に関する知識だけでなく、社会言語的側面、談話的側面、方略的側面も含め言語運用能力を総合的・多角的に測る。また、応用力や思考力を測るような課題を工夫する。
- (4) 取り上げる題材は、受験者にとって内容的に意味のあるものを選ぶ。
- (5) 問題は易しいものからやや難易度の高い発展的なものまで幅広く用意し、受験者の達成度を公正かつ正確に測ることができるよう留意する。使用する語彙は、高等学校における英語の履修範囲を考慮して選択する。長文読解や読解方略に関わる問題においては、やや頻度の低い語句を使うこともあるが、その場合でも文脈から推測できるように配慮する。
- (6) 過去の試験問題評価委員会報告書で要望や批判があった事項については、出題の形式、内容の改善を図る。

2 各問題の出題意図と解答結果

上記のような作成方針を踏まえながら、高等学校卒業段階で到達すべき英語力を公正かつ正確に測定するためには、どのような問題形式で作題するのがよいかを検討した。そのために、昨年度までの問題・内容を分析し、どの部分を継承し、どの部分をどのように改訂・修正を施すのがよいかを検討した上で問題作成に取り組んだ。また、問題の大きな変化は受験者にとって負担を招くおそれもあるので、本試験と同様に追・再試験問題も第1問～第6問の六つの大問で構成することとし、総設問数55問、配点2～6点で出題した。全体的に難易度も適切な範囲内との評価を受けた。

出題意図を表にまとめると以下のとおりである。

大問	中間	出題意図
第1問		音声の知識
	A	基本的な単語におけるつづり字と発音の関係の知識を測定する。
	B	基本的な単語における語強勢の位置に関する知識を測定する。
第2問		語彙、文法、語法、言語使用の知識・能力
	A	与えられた英文を完成するのにふさわしい語句を選ばせることにより、語彙、文法及び語法の知識を測定する。
	B	対話形式の文脈を与え、それにふさわしい発話文・語句を選ばせることにより、場面に応じた言語使用に関する能力を測定する。
	C	文脈を与え、単語を整序させることにより、意図された意味になるような英文を構成する能力を測定する。
第3問		談話レベルにおける文章の理解力
	A	短い文章を読ませ、文脈の理解から未知の語彙や慣用句の意味を推測させることにより、文レベルを超えた談話レベルにおける英語理解力を測定する。
	B	趣旨が明確なまとまりのある話し言葉のテキストを読ませ、発言者の意見の要点を問うことにより、文レベルを超えた談話レベルにおける英語理解力を測定する。
	C	文章を読ませ、文脈にふさわしい内容を空所に補充させることにより、文レベルを超えた談話レベルにおける英語理解力を測定する。
第4問		情報处理的視点からの文章の理解力
	A	図表やグラフに示された情報とあわせて英文を読ませることにより、必要な内容を正確に読み取る能力を測定する。
	B	様々な形式の英文やレイアウトを含む英文を題材に、求められている情報を的確に探し出させることにより、情報処理の一環として英語を理解する能力を測定する。
第5問		出来事の展開を叙述する文章の理解力
		ある視点から語られたストーリーを題材に、想像力を通して状況を再構築させ、ストーリーの展開、概要、要点などを理解する能力を測定する。
第6問		まとまりのある説明的な文章の理解力
	A	比較的長い説明文を題材にして、筆者が読者に伝えようとしているメッセージや行間の意味を考えさせ、個別のパラグラフの内容を理解する能力を測定する。
	B	パラグラフごとの要点と相互間の関係、全体の構成を理解する能力を測定する。

第1問 第1問は、音声の知識についての問題で、AとBの設問で構成されている。Aは基本的な単語における発音とつづり字の関係の知識を測定する問題である。形式は昨年どおりであるが、問題数を一つ減らして3問にした。Bは基本的な単語の語強勢（アクセント）の位置に関する知識を測定する問題である。昨年度は与えられた語と第一アクセントの位置が同じ語を選ぶ形式であったが、今回は一昨年度のように四つの語のうち第一アクセントの位置が他の三つと異なる語を選択する問題で、問題数を一つ増やして4問にした。日常的なコミュニケーションの場面で使用頻度の高い基本的な単語を選び、母音・子音（黙字を含む。）、第一アクセントを問うものであるが、外来語については、日本語と英語の発音・アクセントの相違を気付かせ

ることを意図した。筆記試験で単語レベルの発音やアクセントを問うことにより音声技能を測定する第1問の在り方については、リスニングを除く3技能をバランス良く出題する方向で慎重な議論を重ねた結果、従来どおりAとBの形式を踏襲することにした。基礎的な発音及びアクセントの知識を知っていることは、英語を外国語とする学習者にとって重要であるというメッセージを伝え、学校の英語授業で音声指導を促すことを期待するものである。

第2問 昨年度と同様に第2問は、語彙・文法・語法・言語使用の基本的な知識を測定する問題である。Aは与えられた文にふさわしい語句を選ばせることにより、文法・語彙・語法・言語使用の知識を測定する上で、場面や文脈に応じた語（句）の使い方が問われた。Bは与えられた対話形式の文脈の空所に入れるのにふさわしい英文を選ばせることにより、談話的知識を試す問題である。英文のテーマは、受験者にとって親しみのあるものを選んだ。Cは与えられた語句を並べ替えさせることによって、文全体の構造と基本的な文法知識を用いたライティング技能を測る問題である。配点と問題形式は昨年同様であった。他の大問とのバランスから、五つの空欄に語彙を並べる本試験に対して、追・再試験は六つの空欄に並べる問題にしたため若干難易度を高めた。一部の問題については今後検討を要するとしても、全体の難易度は妥当であったと思われる。

第3問 第3問は談話レベルにおける文章の理解力を測定する問題である。Aは文脈の理解から未知の語彙や慣用句の意味を推測させることにより、談話レベルにおける英語理解力を測定する。受験者によっては、本文中の語句の意味を正確に分からず文脈の理解が難しかったであろうと推察される。Bは話し言葉のテキストを読ませ、発言の意図や要点を問うことにより、談話レベルにおける英語理解力を測定する問題である。今年度は司会者が3人の発言を要約する形式のため、文脈を把握しやすくなったと思われる。Cは複数のパラグラフから成る文章中の空所に、文脈にふさわしい内容の表現を補充させることにより、談話レベルにおける英語理解力、文章構成力を測定する問題である。受験者にとって理解しやすいテーマが選ばれており、昨年と同様に標準的な問題であった。

第4問 身近な図や表を用いて、必要な情報を英文で読み取る力を測定する問題である。Aは説明文とグラフを合わせて読ませることにより、必要な情報を特定する力を測定する問題である。「太陽系惑星の表面温度」は、一般の受験者にとってなじみの薄いテーマであったせいか、やや理解しづらかったと思われる。Bは様々なタイプの英文やレイアウトを含む英文を題材に、情報処理の一環として英語を理解する能力を測定する問題である。レストラン広告を読み取る今年の問題には、受験者が実生活の中で経験し得る事項が含まれており親しみのある内容であろう。広告の文字を昨年よりも大きめにして高等学校教科担当教員からの要望を配慮した。第4問全体としては、易しい問題から中程度の問題となった。

第5問 第5問は出来事の展開を叙述する文章の理解力を測定する問題である。異なる視点から語られたストーリーを題材に、その状況、展開、概要、要点などを理解する力を測定する。与えられた英文を読み、その内容を正しく表現している英文や表を選ぶ問題だが、正確な読解を要求するので昨年と同様に設問数5問で配点は30点とした。本年度は、二人の大学2年生が新入生のために情報共有サイトに書いた1年次の生活体験の内容を読み取るという設定にし、両者の経験談を比較しながら要点を理解させることを意図した。最後の問5は昨年のイラスト

から表を用いる形式に変えてみた。難易度は中程度で、受験者にとって大きな混乱もなくこの設問に対応したと推定される。

第6問 第6問は、まとまりのある説明的な文章の理解力を測る問題である。比較的長い文章を題材にして、説明文の論点や論の構造に注目して読ませることにより、筆者が読者に伝えようとしているメッセージや、行間の意味の理解、パラグラフの要点の把握などを通して、まとまりのある説明的な文章を理解する力を測定している。今年度は生活場面における「既視感」についての論説文を題材とした。Aでは個別のパラグラフの内容に関する問いを五つ設定し、Bではパラグラフごとの要点と相互間の関係、全体の構成を意識した問いとなっている。パラグラフを効果的に読む方略を教育の現場で訓練する上でも参考になるであろう。最後の問題なので時間的に余裕がない、あるいはBが五つの空欄全てに正解でなければ得点にならないといった要素もあるが、最後まで集中力を維持して力を発揮することが受験者に期待される。

3 出題に対する反響・意見についての見解

今年度の本試験、追・再試験については、ほぼ同程度の難易度と見なされる。また、各年度語彙数の増減はあるものの極端に逸脱することがないように常に注意して作成しており、今年度の追・再試験の総使用語数については、全体的なバランスを取って一定の範囲内に収めるようにした。これからも量（使用語数）と質（問題の難易度）のバランスを取りつつ、問題作成に臨むことが必要である。高等学校教科担当教員側から、「高等学校における授業中の言語活動の在り方を更に工夫するように示唆を与える問題であった」との意見があった。おおむね全体的に好評であるとの認識を得ている。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

今後の留意点としては、センター試験が予想以上に教育の現場に及ぼす影響を十分に考慮し、試験の方針・実施は慎重かつ十分な準備を持ってなされなければならない。また、各方面の関係者が十分な意思疎通を図り、受験者にとって意味のある良質な問題を作成しなければならない。さらに、受験者がこれまで培った学力が得点として反映されるテストであるためには、高等学校教科担当教員の意見・評価はできるだけ尊重することが望ましい。

今年度の問題は、昨年の問題形式をほぼ踏襲した設問形式になっている。これは設問形式の大きな変更は、受験者や教育関係者に過度に負担を強いるという配慮からである。しかしながら、毎年設問形式が変わらないということは逆に受験者に同じような問題形式で試験の準備を強いることにつながる可能性があることも懸念される。よって、今日求められる総合的英語力を測定するために、設問形式や内容の更なる改良を検討している。